

女子大生における発達障害児子育て不安の考察

Consideration of femel college student in developmental disabilities Child-rearing anxiety

鹿子田 陸月
人文科学研究科
臨床心理学専攻
Mutsuki kanocoda

Graduate School of Humanities, Division of Clinical Psychology

要 約

本研究では、女子大生の発達障害児子育て不安を明らかにするため、女子大生15名を調査協力者とし、質問紙と半構造化面接による調査を行った。半構造化面接で得られた結果は、KJ法的分析によってその概要を明らかにした。調査協力者が抱いていた不安は、①母親である自分自身への不安、②周囲に対する不安であったことが示された。また、発達障害児の子育て不安についての半構造化面接を受けることによって、調査協力者は発達障害児を育てることに対する意識の変化が見受けられた。

【キーワード】 子育て不安 発達障害 半構造化面接

I 問題と目的

1. 発達障害児の増加と出生

現在、教育や医療の現場では、発達障害のある子どもが増加している。教育現場の実態調査からは、発達障害のある子どもが1996年頃から増加している。このような増加の原因として、発達障害には「連続性」があるという見方に伴う診断基準の変化、発達障害の知識が普及したことに伴う社会的な受容の拡大、そして低出生体重児の増加にみられる胎児環境の変化などが指摘されている（坂爪、2009）。また、出生前診断の立場からは、全妊娠の5%は重篤な遺伝性疾患や先天奇形、機能障害を有する子どもの誕生につながり、妊婦の誰もが遺伝性疾患や染色体異常をもつ子どもを出産す

る可能性があり、障害や病気をもつ子どもの出生は、特別なことではなく、むしろ自然の営みのひとつと捉えることができる。しかし、検査で胎児に異常があるといわれたほとんどの母親が予想外の出来事としての衝撃を受ける。母親は、胎児の障害が明らかになることによって、1、胎児の状態を可視的に確認できない 2、母子間の相互交渉の困難さ 3、親自身の人生が社会的にノーマティブでなくなるといった課題がみられる（村上、2003）。また、母親が羊水検査を受けることを選択した理由には、子どもに異常があるのではないかという不安や障害のある子どもを育てることの大変さ、障害のある子どもが生きていくことの大変さなどがあげられる（横尾、

2002)。そこで、発達障害児が出生したとき親は心理過程を経験するのであろうか。

2. 発達障害児を育てる親の心理過程

これから、発達障害児をもつ親の心理過程について述べていく。まず障害告知を受けた親の心理として、Drotar (1975) の「段解説」とOlshansky (1962) の「慢性的悲哀」があげられる。「段解説」は、ショック、否定、悲しみと怒り、適応、再起という性質の異なる5つの心の状態が少しずつ重なり合いながら、段階的に変化していくことである。「慢性的悲哀」とは、親は子どもの障害を絶え間なく悲しみ続けているという状態であり、Olshanskyはこの慢性的悲哀は多くの親の生じる自然な考えであると述べている。しかしながら、専門家はあまりそれに気づいておらず、この自然な感情を表明することを妨げている。中田 (1995) は、自閉症群や精神遅滞群について、親は子どもの発達につれて生じる様々な出来事に遭遇するたびに、否定と肯定の入り混じった感情を経験する「螺旋形モデル」を提案している。

3. 発達障害児を育てる母親のストレスと不安

発達障害を抱える子どもを育てる母親はさまざまな不安や困難を経験すると考えられる。広汎性発達障害児を持つ母親のストレスは、慢性疾患児や運動発達障害児を持つ母親と比較すると精神的ストレスが高い。その理由は、障害が表面的にはわかりにくいことから、母親が周囲や社会から精神的に孤立することが第一に挙げられている (芳賀、2006)。また、高機能広汎性発達障害児は一見言語的なコミュニケーションが可能であるため、周囲の人間のみなら

ず母親自身も子育てがうまくいかないときに、障害自体ではなく自分を責めやすく、より抑うつ的になる恐れがある (鈴木、2012)。だが、子どもの問題行動が改善しても不適切な夫婦・家族関係、義父母との協力関係の欠如、低い社会支援であると母親のストレスは解決しない (鈴木、2012)。また、母親の夫への育児に関する信頼感や母親自身の趣味に肥やす時間、家族以外の育児相談相手と話す機会などが母親の育児不安と関連している (伊藤、2000)。

これらの研究から、発達障害を抱える子どもを育てる母親の不安は多様であることが分かり、加えて周囲とのかかわりのなかで変化すると考えられる。一方出産する前の母親は、障害受容に関わる不安が見受けられるということが示唆される。子育て時の不安と妊娠時の不安は研究されていても、それ以前の結婚や妊娠をする前の青年期後期に発達障害児を育てることに対しての不安はほとんど研究されておらず、また母親になってからの不安やストレスを測る尺度は存在しても、それ以前の不安の測定もほとんどされていない現状である。

4. 本研究の目的と意義

本研究の目的は、女子大学生の発達障害児子育て不安を明確にすることである。

この研究の意義は、現在子育てをしている母親の障害受容の支援に活かすことと、また発達障害児を育てる母親への理解やこれからの予防的・開発的な支援を明らかにすることである。

II 方法

1. 調査協力者

女子大生15名（平均年齢=20.06歳）

2. 調査日時と場所

X年Y月 私立大学内の教室

3. 調査手続き

(1) 質問紙への記入

①フェイスシート、②子どもへの好意、③育児への肯定感情、④発達障害児を育てる自信、⑤発達障害についての知識、⑥発達障害児子育て不安の有無、⑦自由記述、の7項目について記入を求めた。

(2) 半構造化面接

①発達障害児に対するイメージ、②発達障害児とかかわった経験、初等・中等教育で発達障害児とのかかわり、③将来発達障害児の母親になったらその子をどのように育てたいか、④子育てについての希望、⑤感想を聴いた。なお調査時間は20～30分であった

4. 分析方法

(1) 質問紙の分析

それぞれの項目を集計し、平均を算出した。

(2) 半構造化面接の分析

面接の逐語記録を作り、KJ法的分析を

行った。

Ⅲ 結果

1. 質問紙

質問項目は、①子どもへの好意②育児への肯定的態度③発達障害児への子育て自信④発達障害の知識⑤発達障害児子育て不安とした。結果は、育児への肯定的態度、発達障害児子育て不安、子どもへの好意、発達障害児の子育て自信、発達障害の知識の順に高く出た。それぞれの項目の平均値の結果を図1に表記した。

2. 半構造化面接

(1) 子どもへの好意

すべての調査協力者は「子どもは可愛い。」「子どもの笑顔が好き。」「昔から子どもとかかわることが好きだった。」などと子どもへの好意を語ってくれた。また子どもとのかかわり体験を尋ねたところ、約50%の調査協力者が経験していた。

反対に子どもの苦手なところがあるかを尋ねたところ、すべての調査協力者は「子どもの苦手なところもある。」と答えてくれた。その内容は、「言うことを聞かない

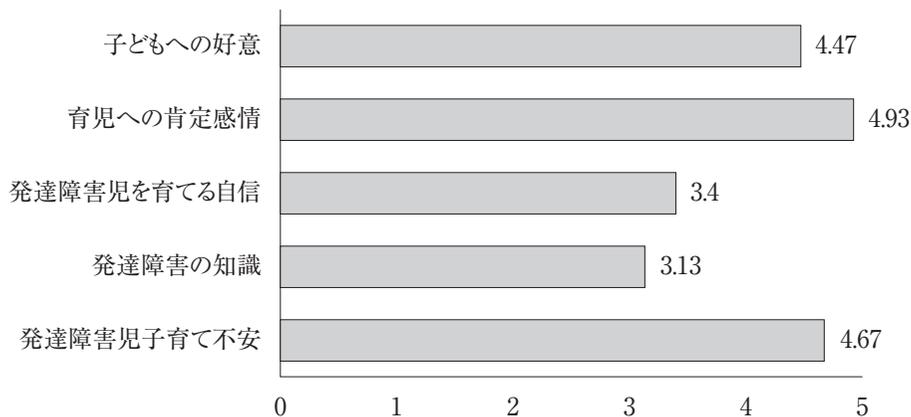


図1 質問紙の質問項目の平均値

ところが苦手。」「何を考えているか分からない。」「躰が出来ていない子どもが苦手。」「スーパーでお母さんを困らせていたりするところ。」などと語ってくれた。

(2) 育児への肯定感情

すべての調査協力者は子育てについて肯定的な意見を述べていた。その内容としては、「子どもを産めることは女性の特権であるから、子育てをしたい。」「結婚と出産は絶対に通る道だと思う。」「結婚よりも子どもを産みたい。」「子育てをしていないことは考えられない。」などが挙げられた。

反対に、子育てにおいて不安なところを尋ねると、80%が「子育てにおいて不安なところがある。」と答えてくれた。「子育てに正解はない。」や「健常児の子育ても大変。」「人間関係が希薄。」といった意見が多かった。しかし、子どもとの関わりの機会が多かった調査協力者は、「愛情を与えれば絶対にいい子に育つ。」「反抗期などの難しい時期も一緒に乗り越えていきたい。」と子育てにおいての不安は少ないようであった。

またどんな子育てをしたいかと尋ねたところ、「好きなことに全力で取り組めるような子どもにしたい。」「好きなことをさせたい。」といった意見が多かった。

(3) 発達障害児への子育て自信

約80%の調査協力者は、発達障害児を育てることに対して、自信は少しあるまたは、どちらでもないと言ってくれた。その理由は、「自分の子どもならば絶対に育てたい。」「子育てを放棄することは絶対に考えられない。」といった意見が多かった。

残りの約20%の自信があまりないと語ってくれた調査協力者は、「普通の子育てで

も上手くいく自信がないのに、さらに障害を持って産まれてくるとなると不安が倍になる。」「発達障害を抱える子どもは、普通の子どもとどう違うのかわからない。」「普通の子どもと同じように接したいけど、出来るかどうかかわからない。」と語ってくれた。

(4) 発達障害の知識

約70%の調査協力者が発達障害について、授業などで学習した経験があり、そのなかの約60%が発達障害の知識がややあると回答してくれた。残りの調査協力者は、発達障害についての予備知識はほとんどなく、メディアなどで視聴したことはあるとのことであった。

約70%の予備知識のある調査協力者は、授業や書籍を読むなどをして積極的に学んでいた調査協力者もいた。その理由を尋ねてみると、「発達障害を抱える子どもが増えているから。」といった意見が多かった。予備知識がほとんどない調査協力者も「発達障害を抱える子どもたちに対する興味はある。」と述べていた。

また、発達障害についての授業を受けた調査協力者は「授業で具体的な支援の仕方を教えてもらったので、機会があれば活かしたい。」と述べていた。他にも、発達障害を「病気」と判断している調査協力者もいた。

(5) 発達障害児子育て不安

すべての調査協力者は発達障害を抱える子どもを育てることについて不安があると語ってくれた。発達障害についての予備知識がある調査協力者は、「その子を親として支えてあげられるか。」「周囲の人からの理解は得られるか。」「発達障害についての

知識が全くない。」「学校でうまくやっているとかがない。」「どのように躰けるのかわからない。」と語ってくれた。

発達障害についての予備知識がほとんどない調査協力者は、「想像がつかない。」「不安でしかない。」「わからない。」「普通の子どもにしか見えない。」といったことを語ってくれた。

またどの調査協力者も「周囲の人の理解が得られるのだろうか。」や「周囲の目を気にせずに子育てができるのか。」といった周囲の人間関係に対する不安と、「疲れてしまわないか。」や「躰がきちんとできるのか。」といった母親としての自分に対する不安を語ってくれた。

(6) 発達障害児に対するイメージ

予備知識のある調査協力者は「幅広いイメージ。」「叫ぶとか、落ち着きがないとか、一つのことに秀でているイメージ。」「全部が全部悪いというイメージはない。」「落ち着きのなさやこだわりは個性だと思う。」「親が死んだらどうなるのだろう。」「何事にもみんなよりも少し遅れてしまう。」と語ってくれた。中でも落ち着きのなさやこだわりといった障害の特徴についての意見が多かった。

予備知識のほとんどない調査協力者は「ちょっと変わった子。」「コミュニケーションを取りづらくて、パニックを起こしてしまう。」「怖いイメージ。」「差別されてしまうかも。」といった意見を語ってくれた。

また以前のイメージは、「近寄りがない。」「親の育て方で障害になると思っていた。」「変な人だと思った。」といったネガティブなイメージと、「障害についてあま

り気にしていなかった。」「素直。」「個性的。」といったポジティブなイメージは、おおよそ半分に分かれた。

(7) 発達障害児との関わり（初等・中等教育を含めて）

調査協力者の9割は、初等・中等教育の時に、普通学級、特別支援学級ないしに発達障害児がいたと語ってくれた。学校以外にも、「友人のきょうだいに発達障害児がいた。」「妹の友達のきょうだいが発達障害を持っていた。」などという例もあった。

調査協力者の70%は以前発達障害児と関わったことがあり、初等・中等教育だけではなく、教育現場への実習などでも関わりを持っていた。

また、初等・中等教育の時に学校の教員から発達障害児についての説明はほとんどなく、説明を受けた調査協力者は20%であった。説明を受けた例では、クラス内のトラブルがきっかけとなっていた。

(8) 将来発達障害児の母親になったらその子をどのように育てたいか

70%の調査協力者は「本人の自由にやらせてあげたい。絵が好きなら、絵をかかせてあげたい。」「こだわりが強いこともあるから、好きなことを好きなだけやらせてあげたい。」「その子が興味を持つことや主張を優先してあげたい。」「障害を個性だと思って、とにかく良さを伸ばしてあげたい。」などといった子どもの長所や主体性を伸ばしていきたいと語ってくれた。

また、60%の調査協力者は「できれば、普通級の学校でみんなと一緒にかわらせたい。人とのコミュニケーションとか、集団行動のルールとかをそこで学ばせたい。」「普通の子どもとまではいかないけ

ど、多少同じように育てたい。」「普通の学校に入れて同世代の子どもと関わりを持ってほしい。」などといった障害の改善と考えられることを語ってくれた。

他にも、「障害を持つということは、偏見を持たれることは避けられないから、その分愛情をかけて育てたい。」「きょうだいがいたらその子たちにも助けてもらう。」「苦手なところに寄り添いたい。」といったことを語ってくれた。

(9) 感想

半構造化面接の最後に調査協力者に感想を求めた。約80%の調査協力者は「今まで発達障害を持つ子どもの子育てについて考えたことはなかった。」「授業以外で話すことがなかった。」「発達障害についての自分の考えが初めて分かった。」「もっと発達障害について考えていくべきだと思った。」「ずっと健常児が産まれてくるとばかり思っていた。」などといったことを語ってくれた。

その他は面接で上手く答えられなかったことに対する謝罪などがあった。

3. KJ法的分析

以上の半構造化面接をもとに、KJ法的分析を行った。その結果、①発達障害児子育て不安、②発達障害児の子育てへの期待・子どもへの支援、③発達障害児へのイメージ、④子育てへの肯定的態度の4つに分類することができた。分析結果の詳細は、以下の表1～4のとおりである。

IV 考察

結果から、すべての調査協力者は発達障害児の子育てに対して不安を抱いていることがわかり、また子育てに対しても肯定的な感情を抱いていることが見受けられた。そして、発達障害児への子育て不安のなかで、もっとも意見が多くあったものが、母親自身の不安と周囲に対する不安であった。これらの点を踏まえ、考察をしたい。

1. 発達障害児子育て不安と子どもへの好

表1 発達障害児子育て不安

上位概念	中位概念	下位概念
発達障害児子育て不安	母親自身の不安	自分に自信を持って育てられるか 自分の感情をコントロールできるか
	周囲への不安	社会とかかわっていけるか 周囲の目を気にせずに育てたい
	受容への不安	周りの子どもとの差を受容できるか 障害を受容できるか 子どもに合わせることができるか
	知識への不安	まったく知識がない わからないことがありすぎる 支援機関がわからない
	支援機関への不安	援助者の姿勢が心配 勉強についていけるか
	教育への不安	先生の理解が得られるか 進級指導はどうするのか

表2 発達障害児子育てへの期待と希望

上位概念	中位概念	下位概念
発達障害児子育てへの期待・希望	子どもの主体性	自由にやりたいことをやらせたい できるところを伸ばしたい その子の主張を優先させたい
	受容	自分の子どもならば育てたい 自分の子どもならばかわいい 自分の子どもならば受け入れられる
	障害の改善	普通の子どもと同じことをさせてあげたい 普通の子どもたちと一緒に学んでほしい 普通の学校に入れてあげたい
	子どもへのサポート	子どもの苦手なところに寄り添いたい 愛情を注いであげたい 周囲の人とのかかわりのなかで成長してほしい
	周囲との協力	同世代の子どもとかかわってほしい 世の中に適応して行ってほしい
	健康	健康であってほしい 元気でいいこに育ててほしい

表3 発達障害児に対するイメージ

上位概念	中位概念	下位概念
発達障害児に対するイメージ	ポジティブなイメージ	素直 個性的 面白い
	ネガティブなイメージ	変わった子 みんなについていくことが難しい 騒がしい

表4 子育てへの肯定的態度

上位概念	中位概念	下位概念
子育てへの肯定的態度	母親への憧れ	子どもを産めることは特権 子育てをしないことが考えられない
	子どもへの好感	女性だからこそ出産したい 子どもは可愛い 子どもは癒される
	関わりの経験	子どもの笑顔が好き 小さいころからきょうだいの世話をした ボランティアでかかわった

感・子育てへの憧れ

すべての調査協力者に「子育てをした
い。」「子どもは可愛い。」「円満な家庭に
したい。」といった子どもや子育てに
対しての肯定的な姿勢が見られたが、発達障害児

を育てることに対しての不安も同じくらい
強く見られた。

またほとんどの調査協力者は将来子育て
をすることを考えているのだが、発達障害
児を育てることについて全く考えていない

ということもわかった。そこで、子どもを愛らしいと思う気持ち、子育てへの憧れが強いからこそ発達障害児への子育て不安も強くなっているのではないかと推論した。

では、子どもへの好感や子育てへの憧れは発達障害児を育てることの不安とどのように関係するのだろうか。調査協力者にとって定型発達の子どもと発達障害児の間にはどのような違いがあるのだろうか。

(1) 定型発達の子どもと発達障害を抱える子ども

① 調査協力者が思い描く子ども

「一つのことには一生懸命になれる子ども。」「無邪気な子どもの声が好き。」「子どものきれいな心に癒される。」「誰にでも接する無邪気ところがとても可愛い。」「元気ないい子。」「反抗期は不安だけど一緒に乗り越えた。」

② 調査協力者のイメージする発達障害児

「暴れてしまう。」「変わった子。」
「空気が読めない。」「意思疎通が難しい。」「個性的。」「こだわりが強い。」
「一つのことには秀でている。」「電車で騒ぐ。」「親が死んだらどうなるのか。」「自分の子どもなら可愛い。」

以上の記述から、調査協力者にとっての子どもと、発達障害児の差について考えてみる。調査協力者の大体が思い描く子ども（以下：定型発達の子ども）とは、元気で素直で人懐っこく、よく笑い、友達と一緒に学校へ行き、年相応に親に反抗し、人生

の課題をともに乗り越えていく存在ではないのかと考えた。

一方、発達障害を抱える子どもは、意思の疎通やコミュニケーションが難しく、こちらが10働きかけても何も反応がないかもしれない。友達と同じように学校へ行けるのか、自分がいなくなったらその子は生きていけるかどうかわからないという存在であると感じた。

これらのことから、調査協力者の考えている定型発達の子どもと発達障害を抱える子どもの差は非常に大きいものであると考えた。そして調査協力者は定型発達の子どもの子育てを思い描き、子育てへの意欲があるほど、発達障害を抱える子どもを育てることがどこか遠いものになってしまうのではないかと考えた。

その、発達障害児を育てることを自分とは別の世界であると考えることから、Drotar (1975) の「段解説」の第1段階のショックの心の状態やOlshansky (1962) の「慢性的悲哀」における子どもの障害を絶え間なく悲しみ続けている親の心理に繋がるのではないかと推論した。

(2) 定型発達の子どもの子育てと発達障害児の子育て

① 定型発達の子どもの子育て

「自分ができなかったことを子どもにやらせてあげたい。」「勉強も遊びも全力で取り組んでほしい。」「子どもの成長を夫婦2人で見守りたい。」「愛情があればいい子に育つ。」「好きなことをやらせてあげたい。」「何か1つことに全力で取り組めるような子どもになってほしい。」「応用力のある子ども

に育てたい。」

② 発達障害児の子育て

「障害を持つことはどこかで弊害を受けること。その分愛情を注ぎたい。」「その子はもう病気だから、私が強いメンタルを持つ。」「きょうだいにもその子を守ってもらうように言う。」「無理に普通の学校に行かせない。」「自分に自信を持って子育てをする。」「子育て放棄はしたくない。」「子どもに好きなことをさせたい。」「障害を個性だと思い、良さを伸ばしたい。」「普通の子どものように育てたい。」「普通とまではいかななくても、同じレベルまで育てたい。」

調査協力者のこのような語りから、定型発達の子どもの育てるということは、子どもの健やかな成長を願うほか、「こんな風に成長して欲しい。」「こんな人間になって欲しい。」といった成長への期待や子どもの成長をサポートしていきたいという姿勢が見られた。加えて定型発達の子どもの子育てを語る調査協力者の表情は、明るく嬉しそうであった。

一方発達障害児の子育ては、周囲からの弊害や障害を抱えることでの困難を想定し、そのようなことから子どもを守るような姿勢が見られた。加えて発達障害児の子育てを語る調査協力者の表情は、うつむきがちで言葉を詰まらせていた。また「守ってあげなくては。」「メンタル面でつぶれてしまいそう。」といった語りから、調査協力者は発達障害児を育てることに対して多

大な困難を感じていると思われた。そして、これは自身の人生が社会的にノーマティブでなくなるという、胎児の障害が明らかになった時の母親の不安に類似しているのではないかと仮定した。

調査協力者の語りから、定型発達の子どもの育てることは、子どもの成長に希望や期待を抱くことに対し、発達障害児を育てることは、親のこれからの人生が大きく変わってしまうのではないかと不安を抱くことになるかと推論した。

(3) 発達障害児の子育て：普通の子どものように育てたい

調査協力者の60%が「普通の子どものように育てたい。」「普通の学校に通い、普通の子どもたちとの関わりを持ってほしい。」と語っていた。また、そう語っていた調査協力者の大半は「子どもの出来ることを伸ばしたい。」「子どもの好きなことをさせたい。」「自由にやりたいことをさせたい。」と語っていた。

初めに「普通の子どものように育てたい。」という意見を聞いたとき、発達障害児に普通の子どもと同じことを願うことは障害を受け入れるというよりは、障害の改善を期待しているのではないかと感じた。果たして、「普通の子どものように…。」という期待は、子どもの障害の改善を期待するものなのだろうか。調査協力者は、発達障害児の子育ての語りも定型発達の子どもの子育ての語りでも「子どもに好きなことをさせてあげたい。」「自由に好きなことをさせたい。」といった語りが多かった。この語りから、調査協力者にとっての「普通の子どものように。」とは、子どもの主体性や意見を尊重し、その子どもの強みを伸

ばすことではないかと考え、発達障害児の子育ても同様であるのではないかと推論した。

また、このような「子どものよさを伸ばしたい」「子どもに好きなことをさせてあげたい」という気持ちは、山根（2012）による発達障害児をもつ母親における子どもの障害の意味づけの「成長・肯定型」に類似していると思われた。その「成長・肯定型」の特徴は、子どもの良さを見出すなど、障害特性を含めた子ども全人格に対して肯定的な側面を見出していることである（山根、2012）。

これらの事項から、「普通の子どものように育てたい」という気持ちは、障害の改善というよりも、自分の子どもを障害の有無問わず障害を含めてその子を愛し、育てたいという思いなのではないかと考えた。

2. 発達障害児子育て不安：母親自身の不安と周囲に対する不安

KJ法を参考にした分析により、もっとも多く分類できたものが、「母親自身の不安」と「周囲に対する不安」であった。これから、これらのことを考察していきたい。

(1) 母親自身の自身の不安

「自分に自信を持って育てられるか。」「自分の育て方で変わってしまうかも。」「どこかで間違えてしまうかもしれない。」「子どもをきちんと支えてあげられるか。」「反抗期など母親として対応できるか。」「子育てという責任が不安。」「甘やかしてしまうかもれない。」「発達障害児にどう起こっている

のか。」「メンタル面でつぶれてしまいそう。」

まず調査協力者はみな出産、育児の経験がなく、ましては発達障害児を育てることなど考えたことがないという調査協力者が大半であった。調査協力者にとっての定型発達の子どもの子育ては、憧れも強くある反面不安もあるとのことであった。

実際は、乳幼児を持つ母親の8割以上が「疲れやストレスがたまりイライラする」と答え、3割以上の母親は子どもをうまく育てられないと答えるなど、多くの母親が育児に困難を抱えている（園田、2012）。この研究から、定型発達の子どもの育てる母親自身も不安を感じていると考えられる。

またこのように母親自身の不安とは、子どもと触れ合う時間が最も多いため、母親の役割の重大さに対する不安ではないかと考えた。それに加え、発達障害を抱える子どもの子育てとなると、母親としての不安がより一層大きくなるのではないかと感じた。

(2) 周囲への不安

「周囲からの偏見は免れない。」「相談できる人が周りに欲しい。」「周囲の目を気にしたくない。」「周囲の人は理解してくれるのだろうか。」「母親一人で不安を抱えてしまいそう。」「地域の間人間関係が希薄。」「社会とちゃんとかわっていけるのか。」

武藤ら（2008）によって、発達障害児を持つ母親は、周囲の理解がなくては子ども

が社会で生きることが難しいと考えているということが分かった。また先行研究から、家族や友人といった周囲の人からの理解が得られることで母親の不安が軽減するということが分かった。その点からも、やはり発達障害児を育てることに於いて、周囲の理解は重要なものであるのだと推論できる。

また、現在は日常生活を送る場としての地域社会で、負担感と孤立感を抱えながら「つながりたいけれども、どうつながっていいかわからない」まま育児を行っている人もいる(杉野、2010)。定型発達の子どもの子育てでも周囲とのかかわりの不安を感じるのであれば、発達障害児の子育てとなると地域社会での差別や偏見といったことが、その不安がより強くなるのではないかと考えられる。加えて、調査協力者たちは子育てを経験したことがないためより不安を感じているのだろうと推論した。

(3) 周囲への不安—教育や支援期間—

調査協力者の語りのなかで教育や支援期間への不安も見られた。その内容は教育現場での実習で、教員が発達障害児に対しての叱責が多かったといったものだった。その調査協力者は、「先生といった支援者にももっと障害を理解してほしい。」と語っていた。

また初等・中等教育で発達障害児とのかかわりのあった調査協力者のなかでは、「年齢が上がっていくにつれ、後ろめたくなったのか学校にあまり来なくなった。」「私を含めてみんな、その子(発達障害児)とはかかわりたくなかった。」などと語っていた。その調査協力者は、学校で子どもはうまくやっつけられるのかと語ってい

た。

これらのことから、教師や支援者、また同級生といった教育現場での発達障害児とのかかわりは、今後発達障害児を育てる親の不安に少なからずとも繋がりがあのではないかと推論した。

3. 早期の不安の明確化と障害受容

本研究の目的として、早い段階での不安を明確にすることによりその後の障害受容の手助けになることを挙げた。そのためこの調査を行うことによって、調査協力者の発達障害児を育てることに對して気持ちの変化はあったのかを考察したい。

(1) 半構造化面接を終えての調査協力者の感想

「発達障害児のこと、授業以外で考えたことがなかった。」「まさか自分が発達障害を持つ子どもを育てることなんてないと思っていたけれど、考えていかないといけなかった。」「自分が発達障害児に対してこんなことを考えていたなんて、驚いた。」「今日こうやって自分の子育てについて考えをまとめることができてよかった。」「出生前診断などからも、障害は自分に関係ないものではない。考えていくことが大切。」「今思えば、障害は身近なものになってきているから、親になったら知識をつけなくては。」

調査協力者は始め、自身が発達障害児を育てることについて考えたこともなかったと語っていた。

しかし、この半構造化面接を通して発達障害児を育てることについて考えることに

よって、発達障害児を育てることが決して自分とは無関係なものではないという問題意識が芽生えたのではないかと考えられる。

このことから、早い段階で発達障害児の子育てについて考えることで、その後の障害受容への手助けになるのではないかと推論した。

V まとめと今後の課題

1. まとめ

本研究の目的は、女子大生の発達障害児子育て不安を明らかにすることであった。そこで調査協力者である女子大生15名から、質問紙と半構造化面接による調査を行った。

本研究のまとめは以下のとおりである。

① 子育てへの憧れが強いほど、発達障害児への子育て不安が強くなる。それは、調査協力者の定型発達の子どもや子育てと発達障害児の子どもや子育てのイメージの差が大きいことから示唆された。

② 調査協力者の「普通の子どものように育てたい。」という気持ちは、子どもの障害の改善というよりも、定型発達の子どもの子育てのように、子どものよさを見出し、愛したいという期待であると推論できた。

③ 青年期後期の発達障害児子育て不安は、「母親自身の不安」と「周囲に対する不安」が最も多いことが明らかになった。

「母親自身の不安」は、定型発達の子どもよりも、発達障害児は障害がある分、子育てが難しくなることと、また母親という役割の重さから生じるものだと考えられる。

「周囲に対する不安」は、調査協力者のほとんどは地域社会の関係の希薄さに不安を感じていることが示され、かつ発達障害児となると差別や偏見といった問題が生じる恐れがあるのではないかと考えられた。また支援現場での支援者の態度も不安に関係があることが推察された。

④ 発達障害児の子育て不安についての半構造化面接を受けることによって、調査協力者は発達障害児を育てることに対する意識の変化が見受けられた。

2. 今後の課題

発達障害児子育て不安を明らかにするにあたって、調査協力者の人数が少数であったことと、調査協力者の全員が育児に対する肯定的感情を抱いていたため、結果に偏りがあったことが考えられる。反対に育児に対する肯定的感情を抱いていない調査協力者では、異なった結果が出たのではないかと示唆される。今後、いろいろなスタンスの調査協力者を数多く集めての研究が必要である。

謝辞

本論文を作成するにあたって、調査にご協力いただきました皆様、ご指導賜りました片野智治元教授、山口豊一教授、野島一彦教授に厚くお礼申し上げます。

引用・参考文献

- 相浦沙織 氏森英亞 (2007). 発達障害児をもつ母親の心理過程—障害の疑いの時期から診断名がつく時期までにおける10事例の検討. 目白大学心理学研究, 3, 131-145.
- 朝倉和子 (2008). 自閉症(傾向)・軽度知

- 的障害児の母親の主観的困難（たいへんさ）と当事者による対処戦略に関する研究．東京家政大学紀要，**48**，71-78.
- 芳賀彰子・久保千春（2006）．注意欠陥/多動性障害，広汎性発達障害児を持つ母親の不安・うつに関する心身医学的検討．心身医学，**46**(1)，75-86.
- 伊藤斉子・川崎千里・土田玲子・高原朗子・吉玉桂子（2000）．学習障害およびその周辺児を持つ母親の育児不安とその影響要因に関する研究．長崎大学医療技術短期大学部紀要，**19**，109-120.
- 黒木良和（1995）．出生前診断における遺伝カウンセリング．医学の歩み，**172**(8)，516-519.
- 武藤葉子・池田友美・圓尾奈津美・郷間英世（2008）．軽度発達障害をもつ子の母親の「わが子の障害」のとらえ方—子育てについての「語り」を通して—．教育実践総合センター研究紀要，**17**，59-66.
- 村上真理・中込さと子・横尾京子（2003）．発達障害がある子どもと家族のケア；助産師の立場から．小児看護，**26**(12)，1654-1658.
- 中田洋二郎（1995）．親の障害の認識と受容に関する考察—受容の段階と慢性的悲哀—．早稲田心理学年報，**27**，83-92.
- 中田洋二郎（2009）．発達障害と家族支援—家族にとっての障害とはなにか—．学習研究社発行，p145.
- 沼澤聡子・菅野和恵（2010）．自閉症児を育てる母親のストレスに関する研究．筑波大学学校教育論集，**32**，41-50.
- 坂爪一幸（2009）．発達障害の増加と懸念される原因についての考察．早稲田教育評論，**26**(1)，21-32.
- 杉野聖子（2010）．子育て支援における地域組織化活動—関係づくりを視点とした「子育て講座」の実践をとおして—．大妻女子大学人間関係学部紀要，人間関係額研究，**12**，69-84.
- 鈴木俊介（2012）．広汎性発達障害児の母親が経験する育児ストレス児童の知的水準との関連をめぐって．精神医学，**54**(11)，1135-1143.
- 園田菜摘（2012）．母親の育児不安に関する研究：サポート，子どもの気質，養育行動との関連．横浜国立大学教育人間科学部紀要，I，教育科学14，41-47.
- 山根隆弘（2012）．高機能広汎性発達障害児・者をもつ母親における子どもの障害の意味づけ：人生への意味づけと障害の捉え方との関連．発達心理学研究，**23**(2)，145-157.
- 横尾京子・百田由希子・倉光広子・三春範夫・大濱絃三（2002）．出生前診断へのニーズをもつ人々の不安に対する助産婦の支援活動．周産期医学，**32**(1)，42-46.
- 吉田弘道（2012）．育児不安研究の現状と課題．専修人間科学論集，心理学篇，**2**(1)，1-8.